



Title	村上春樹文学における物語の研究 [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	肖, 禾子
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第15582号
Issue Date	2023-06-30
Doc URL	<a href="https://hdl.handle.net/2115/90240">https://hdl.handle.net/2115/90240</a>
Rights(URL)	<a href="https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/">https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/</a>
Type	doctoral thesis
File Information	Xiao_Hezi_abstract.pdf, 論文内容の要旨



# 学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

氏名： 肖 禾 子

## 学位論文題名

### 村上春樹文学における物語の研究

#### ・本論文の観点と方法

本論文は、現代日本を代表する世界的な作家村上春樹の小説における物語の位相に着目し、そのことを理論的かつ具体的に研究することを目的としたものである。村上氏は人気作家であり、その小説は文芸批評家および文芸研究者によって盛んに論じられている。村上氏の小説テキストに共通に認められる物語の構造や、作品内で直接に言及される物語に関する観念についても、多方面から研究が行われてきた。ただし、各作品の内容を具体的に検討した上で、物語の持つ機能や意味を原理論的に考察する方面においては、いまだ十分とは言えない。また、研究史上の通説として、「謎解き」「父殺し」「システムへの対抗」などのキーワードが固定観念となり、読解をそれらの枠組に当てはめて行う方式が横行しているきらいがある。さらに、小説作品や作者について、「自己回復」「救済」などの見方で一方的に称賛することに終始したり、人物や作者の言動や物語の結末の一断面をもって倫理的な判断を下したりする論考も少なくない。本論文はこのような先行研究を批判的に踏まえ、改めて村上小説のテキストを徹底的に読解し直した上で、そこに見られる物語の構造と機能に再検討を加えた。すなわち野家啓一による物語の哲学、ネルソン・グッドマンの分析美学、ジャック・デリダの脱構築、さらにナラトロジー（語り論）などの理論と節合して、村上春樹文学における物語に関する総合的な追究を行った。その結果として、本論文においては、村上小説が自らを生成する物語についての物語となっていること、またその自律的な語る行為が、生を救済する側面と、主体を異質化させたり消滅させたりする側面との両義性を備えていることを明らかにした。本論文は、このような物語そのものへのメタフィクション論的な考察によって、村上作品のみならず、物語の創作と構造一般の探究に資する研究を目指したものである。

#### ・本論文の内容

本論文は序論・結論の外、全二部八章から成る。序論では、村上春樹の研究史を概観し、それらの先行研究の問題点を明らかにし、本論文の目的と研究方法について論じた。

第一部は長編小説の作品研究を、物語のメカニズムに即し、個々の作品の独自性に沿って詳しく論じている。村上氏の小説においては、書くこと・語ることについてテキスト内に自己言及的に明記され、物語が物語生成のプロセスそのものをなぞって語られることが多い。そのような一種の物語生成の機械として、物語が物語を作り出す様相を明らかにした。また、そこにおいて、逆に語られない・語りえない空白が意図的に配置され、それによって続く物語の言説が誘発される特徴にも着目した。さらに、これらの物語生成に関する物語が、自律した語る行為として生を救済する機能を有するものとして描き出されると同時に、むしろ人物を異質なものとして提示し、あるいは消滅させることがあることにも注目した。これにより、従来の説のように、村上小説を単純に救済の物語としてとらえるのではなく、物語が人間に対して肯定的のみならず否定的な影響を与えうるものとして再検討を加えた。このような形で、物語そのものの持つメタフィクション（物語についての物語）的な特徴を、村上文芸の真に独特の要素と見なして再評価したのである。

第一部第一章では、『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』を取り上げてその物語構造を解明した。この小説の「私」を語り手・主人公とする「ハードボイルド・ワンダーランド」の章と、「僕」を主体とする「世界の終り」の二重構造に着目した。これらの交互に展開される二つの物語における

「私」と「僕」の二つの主体において共通に、語ることが自律的な行為として呈示され、物語が、主体に消滅や死をもたらす契機と主体に創出・再生を与える契機との両義性を帯びていることを論じた。第二章では、『ねじまき鳥クロニクル』を対象として、複数の登場人物の言動から、テキストの空所と創造との関係に関わる物語生成の原理を明らかにした。この小説の登場人物たちはいずれも、真実を追究するために、自ら物語を作ることを基本的な行動パターンとしている。また、複数の物語間の接続によって、むしろ物語に空所が生じ、断絶が生じるというパラドックス的な物語の性質を論じた。第三章では、『海辺のカフカ』の物語を分析し、異なる人物や事象の間を、「メタファー」の論理によって結びつける構造を分析した。「メタファー」とは、あらゆる存在や事象が、他の存在や事象と同一化できるとする原理である。さらに、現実が常に非現実とともにあり、そのことが物語世界を変様させ、また解体をも促進するという物語の機能についても論じた。第四章では、『1Q84』を読み解き、その物語が、全体として方向性の相反する二つの物語を内包すること、また物語による世界の置き換えという村上小説の様式を顕著に示すことを明らかにした。物語行為による世界の置き換えの結果として、三部構成の小説のうち最後の第三部で活躍する牛河の死に着目し、第一部・第二部からの天吾と青豆の物語が新生の結末を迎えるのに対して、この設定を物語が自己相対化を行ったものとしてとらえた。第五章では、『騎士団長殺し』について、主人公「私」が肖像画を創作する過程を描く表現を詳しく読解した。自己内部における他者としての「顔のない男」を描こうとした「私」の行動を、矛盾を帯びたものとして分析し、そこから「私」において現れた自己表象の挫折と不可能性を論じた。

第二部では、村上春樹の物語創作の様態と村上作品における文体と様式を、関連領域との繋がりに配慮してさらに具体的に研究した。村上の小説は、文芸や音楽作品の引用によって織り成され、多種多様なテキストとの間の交通を通して結実したものである。第六章では、村上訳のフィッツジェラルド『グレート・ギャツビー』の文章の特性を検討して、日本語文学でありながら、英語文学にも近いとされる村上小説の文体との繋がりを論じた。また、村上の文体を、特に夏目漱石や志賀直哉らの文体を参照して、日本近代文学における翻訳文体の系譜に位置づけた。第七章では、村上作品における音楽の引用の仕方を、意味内容の触発、すなわち作家の意図に依存しない物語のテキスト生成の問題と見なして追究した。テキストは他のテキストによって触発され、元のテキストの意味内容が、新たに生成されたテキストに織り込まれる。このような物語生成の原理を踏まえて、音楽が村上作品の物語を根底において支えていることを論じた。第八章では、「踊る小人」「鏡」などの作品を対象として、現実の非現実化、自己の他者化、さらには人間が単に肉に還元されるといった不条理な解体や逸脱、すなわちグロテスクな表現を、村上作品の必然的な要素と見なした。グロテスク様式に関する従来の研究を参照し、グロテスクにまつわる村上の物語の性質を論じた。

結論では、本論文で展開した議論を各章ごとにまとめ、村上春樹文学における物語に関する研究の成果を確認した。また各章の論旨の整理を行って、村上文学における物語に関する総合的な評価を述べた。最後に本論文の成果を踏まえつつ、村上春樹研究の将来性と可能性について論じた。